

# 第8期東京都生涯学習審議会

## 専門部会 第5回

### 議事録

平成23年3月4日（金）

午後5時59分から午後7時58分まで

都庁第二本庁舎31階 特別会議室23

○出席委員

村上 徹也 委員

生重 幸恵 委員

太田 篤 委員

古賀 正義 委員

平賀恵美子 委員

柳 久美子 委員

○出席オブザーバー

松澤 保 委員

## 東京都生涯学習審議会 専門部会 第5回 会議次第

- 1 開 会
- 2 議 事
  - (1) 専門部会のまとめ
- 3 その他
  - (1) 今後の予定
- 4 閉 会

### 【配付資料】

- 資料1 第8期東京都生涯学習審議会 専門部会報告案
- 資料2 第1回専門部会における各委員の発言を踏まえた課題整理
- 資料3 第2回専門部会における各委員の発言を踏まえた課題整理
- 資料4-1 第8期東京都生涯学習審議会 専門部会が提案する施策案
- 資料4-2 専門的教育人材の活用方策について
- 資料4-3 区市町村における地域教育の取組の活性化
- 資料4-4 専門的教育人材の確保・養成のしくみ（イメージ）
- 参考資料1 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月）
- 参考資料2 リクルート「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」（平成23年1月）
- 参考資料3 「『2010年高校の進路指導に関する調査』結果一覧」（平成23年2月）（出典：リクルート「キャリアガイダンスNo.35」）
- 参考資料4 「学校外のキャリア教育プログラム」（工藤委員所属団体プログラムの紹介）」（出典：リクルート「キャリアガイダンスNo.34」）
- 参考資料5 「キャリア教育で学校を変える、教師が変わる～シリーズ・改革者たち（34）（生重委員）（出典：リクルート「キャリアガイダンスNo.35」）
- 参考資料6 「ぼくらとおしごと。～職業人インタビュー」（平賀委員提供資料）

## 第8期 東京都生涯学習審議会 専門部会 第5回

平成23年3月4日（金）

開会：午後5時59分

【主任社会教育主事】 それでは、ただいまから、第8期東京都生涯学習審議会第5回専門部会を開催いたします。

本日は、工藤委員が御欠席です。

それから、松澤委員がオブザーバーとして御出席いただいております。

そして、工藤委員は御欠席なのですが、育て上げネットから松野様が傍聴で入っていらっしゃいますので、よろしく願いいたします。

それから、事務局ですが、地域教育支援部長と管理課長が議会の関係で欠席になります。

それでは、よろしく願いいたします。

【村上部会長】 それでは、これから最後の専門部会になりますけれども、始めたいと思います。

まず、事務局からたくさん資料を用意していただいていると思いますので、資料の確認をお願いいたします。

【主任社会教育主事】 それでは、机上左手のほうに、会議次第、それから座席表がございます。

資料1が、全体会に向けた専門部会の報告案になります。それから、資料2が第1回の専門部会の課題整理。資料3が第2回の課題整理。資料4-1が全体をまとめた施策案について。資料4-2が専門的教育人材の活用方策。資料4-3が区市町村における地域教育の取組の活性化。資料4-4が確保・養成のしくみ（イメージ）となっておりますので、御確認ください。

それから、参考資料は1から6までございます。

1が、中央教育審議会のキャリア教育・職業教育の在り方です。参考資料2はリクルートのキャリア教育に関する調査です。「キャリア教育への対応状況」ということで、対応ができていないというのが4割あるという結果が出ております。それに関連して参考資料

3から6までありますので、御確認ください。

よろしいでしょうか。

資料については以上です。

【村上部会長】 ありがとうございます。

それでは、引き続き、今御説明いただいた資料の内容について、説明を事務局からお願いしたいと思います。

【主任社会教育主事】 それでは、資料1から簡単に御説明してまいります。資料1から資料4-4までを全体会への報告資料といたします。

資料1の専門部会報告案を御覧ください。ここでは、1番として、専門部会における審議経過、それから次のページの2番目で、第1回の専門部会の各委員の発言を踏まえた課題整理ということで、(1)の「5つの視点」を書いてございます。1回目でお話をさせていただいたものをまとめたものになっております。特に基本的な力をどう身につけるかや、仕事のイメージをいかに獲得させるかという、この五つの項目が出されていたかと思えます。それを踏まえて、(2)の「施策を考えるうえで重視すべき視点」として、【体験】を通じて培われる力の重要性ということが出されております。

3番目が、第2回の専門部会の課題整理になります。このときは、東京都高等学校進路指導協議会事務局長である浦部主幹教諭の報告を基に、都立高等学校の支援、特に普通科中堅校や進路多様校への支援を中心に課題整理をいたしました。そのポイントをまとめてございます。

次のページです。専門部会の報告案について、資料4-1にまとめてありますが、それについての説明がこのページになります。

資料4-1を見ていただきながら、まとめの説明をしたいと思います。

第8期全体会へ提案するというので、まず最初に、企業・大学等に求められる教育支援の役割というのが左側に4点並んでおります。教育と職業の関連性を高める。それから、子供や若者のモチベーションを高める。それから、子供や若者の社会性や公共心を高める。そして、対人関係力や意思決定力を育み、高めるという教育支援の役割ということで、これらについて支援をしていくということでまとめてございます。

それから、具体的な教育支援の方策のところになります。ここでは、地域教育推進ネットワーク東京都協議会の部分が上の段になります。

先ほどの教育支援の役割、これを実現する仕組みとして、このネットワーク東京都協議

会を設置して教育支援のネットワークを広げてきたところですが、1つは、ここを拡充していくということで設計をさせていただきます。

その中に、基本的な考え方としては、真ん中の「◆」の縦書きに書いてある説明がありますけれども、ここにありますように、学校・家庭・地域の連携・協働の取組の支援や、企業・大学・NPOが自発的意思に基づいて活動をサポートしていくということで、求められる機能・役割を（1）から（5）まで挙げてございます。

特に、御議論いただいた中で（3）の部分と（5）が、これまでにない新たな機能として挙げてございます。

（3）の企業等が開発した「教育支援プログラム」に関する「評価（推奨）」機能の発揮というところが一つございます。

それから、2点目で、五つ目の（5）のところ、教育支援人材として活用するための機会をつくるということでまとめております。

右側のほうに行きますと、区市町村教育委員会との連携・協力体制の構築ということで、小・中学校への支援、それから地域における教育支援の仕組みということで、教育支援コーディネーターのスキルアップ支援などが載せてございます。また、放課後活動をはじめとした学校外教育活動への支援ということでまとめております。

それから、下の段の「都立学校教育支援コンソーシアム」、これも前回御議論いただいたところですが、こちらは都立学校への支援ということでまとめております。

こちらの機能・役割についても、（1）（2）（3）（5）が、これまでの取組で新たに載せられたものになっております。

特にこの「都立学校教育支援コンソーシアム」というのは、ネットワーク協議会のこれまでの取組と違って、単に学校からの求めを待つのではなくて、能動的に教育活動を展開するスキームが事業展開することを目指すということで設定をしております。

具体的には、その（1）（2）にありますように、企業等の人材を高校の授業などに担ってもらっていくということや、プログラムの開発ということが載せてございます。

前回御議論いただいたように、この人材の確保や養成、それからプログラムの開発につきましては、都立高校のタイプに応じた支援ということで、進学校、中堅校、それから進路多様校にそれぞれタイプに応じた支援をしていく必要があるということで、この表の中に入っております。

それから、その下、特別支援学校というところがあります。ここが、実はまだ話合わ

れてない要素になります。

それから、機能・役割の（５）のところにあります、高校中退者、それから進路未定卒業生などに対する「セカンド・チャンス教育」の機会の提供、ここがまだ議論がされていないところになっております。

それから、続いて資料４－２を御覧ください。こちらは、先ほどの都立高校の支援をしていくというふうに言っていたところで、人材の養成・確保や、プログラム開発をした上で、どういう活用方策が考えられるかということ資料４－２でまとめてございます。

１点目が、教員として「奉仕」や「産業社会と人間」等の教科・科目を担当するというもので、特別免許状の授与が必要な場合もありますが、教科・科目を担当してもらうという活用の方法になります。

２点目が、市民講師としてこの「奉仕」、「産業社会と人間」の教科・科目を通年で担当していくというものでございます。

３点目が、これらの授業の一部の時間を、市民講師、特別非常勤講師として担当するというものでございます。

それから、４点目としては、「キャリア教育」プログラムの一部にゲストティーチャーとして参加するということがございます。

５点目のほうは、「奉仕」や「キャリア教育」のカリキュラム編成のときのアドバイザーとなっていくということでございます。

６点目は、進路指導部において、進路アドバイザーとして教員や生徒を支援する、こういう活用が考えられるのではないかと示しております。

そして、資料４－３です。先ほど、地域教育推進ネットワーク東京都協議会の拡充ということでお話をしました。ここは、区市町村を支援していくということですから、小・中学校に向けてどんなことができるかということで、先ほど機能・役割を挙げたわけですが、その仕組みとして、これまでのネットワーク協議会の事務局を設置した流れを書いております。企業・大学・NPO等との相互のやりとりの中で、この協議会事務局がそのマッチングの中心になっていくということでございます。

その四角の中にある黒く書いたところが、先ほどの新規に出したものになっております。

「教育支援人材として活躍する機会づくり」、この中で、企業等の人材が教育活動を支援していくということで、小・中学校に向けては、具体的には学校支援ボランティア推進協議会、学校支援の仕組み、それから、地域コーディネーターなどの役割を果たしていく

ということで挙げてございます。

それから、学校外教育活動につきましては、放課後子供教室などでのコーディネーターとして入っていく、つながっていくということで、この活性化の図をつくっております。

それから、もう一つ、資料4-4のコンソーシアムのほうです。こちらは、都立高校への支援ということで、その仕組みのイメージをつくったものでございます。

中央の「都立学校教育支援コンソーシアム事務局」（仮）ですが、そこを中心にしながら、上に向かう矢印にありますように、都立高校教育アドバイザーの委嘱をし、この都立高校教育アドバイザーは、その下に矢印がありますように、講師養成のプログラムの作成や、「産業社会と人間」等のカリキュラム作成（教材作成）をしていきます。そのプログラムやカリキュラムも含めて、このアドバイザーを高校へ派遣していくというのが1つ目的でございます。

それから、もう一つは、その下にありますように、企業・NPOなどの人材を紹介していただいて、その方たちに講師養成の研修を受講していただく。そのことで都立学校へ入っていくということですが、ここでの都教委の役割は、その養成研修を行ったときの認証ということで、例えば特別免許状や、非常勤講師あるいはゲスト講師とかアドバイザーとして認証を行い、学校へ入れていくという仕組みでございます。

資料4-1にまた戻っていただければと思いますが、これまで議論してきたものの中で、今のネットワーク東京都協議会や新たなコンソーシアムの在り方について、例えば一本化が必要とかそういうこともあるかもしれませんが、そのことについては、今後議論いただき、また高校教育の改革が今進められていますので、そういう流れの中で事務局でも検討するとして、この専門部会で御議論いただく中身については、その機能というところで考えていただければと思います。

ネットワーク協議会については、区市町村、小・中学校を支援する機能としてどんなものが必要だったかということでまとめてございます。

それから、コンソーシアムのほうにつきましては、都立学校を支援するという観点での機能や役割ということでまとめていますので、その機能・役割ということで考えていただければということでこの表をつくっております。

資料の説明については以上です。

**【村上部会長】** ありがとうございます。

それでは、専門部会としては最後になります議論を始めたいと思いますが、今御説明が

あったように、この資料全体を今日は審議していくと時間が足りなくなりますし、もう既に前回までに、特に資料4-1の機能・役割の黒くなっている部分の大半はかなり突っ込んだ議論が行われてきておりますので、今日は特に資料の中で3点ほど積み残しの部分を含めて、皆さんに議論いただきたいと思っております。

1点目は、資料4-1の右下のほうの枠の下から二つ目の「特別支援学校」について、企業やNPOがどのような支援・役割を果たせるかということについて、まだ議論してこなかった部分ですので、そこについて御意見をいただきたいのが1点目です。

それから、2点目は、同じく資料4-1の一番下の部分になりますが、高校中退者、進路未定卒業者などに対する「セカンド・チャンス教育」の機会の提供という、ここの部分について話をしていきたいのですが、特に今日はこの部分については、研究の御専門もございますので古賀委員にいろいろと御意見をいただければと思います。あと、取組としては工藤委員の「育て上げネット」が、この部分に専門的に取り組んでいらっしゃるの、工藤委員は御欠席なんです、幸いスタッフの松野さんに来ていただいていますので、是非現場の立場からこの施策について意見をいただければと思っております。

それから、3点目は、今日新たに示された資料の中で、4-2から4までありますが、4-4のコンソーシアムについては前回までにかなり活発な議論をしまりましたので、ここはもうひとまず議論はまとまったということにして、資料4-2に示されている「専門教育人材の活用の方策」について、それから、4-3の「区市町村における地域教育の取組の活性化」の部分について、ここは少々時間をかけて御意見をいただければと思っています。

では、そういう流れで進めていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

それでは、まず1番目、特別支援学校に関する支援方策ということで、皆様から御意見を賜ればと思います。いかがでしょうか。

どうぞ。

**【生重委員】** ドラマケーションという、コミュニケーションを高めていくためのプログラムで、特別支援教育の学校にも入っておられるある専門学校の方から、特別支援学校の子供たちは、進学校、中堅校、進路多様校のプログラムとはまた別に、それぞれの個々の個性に合わせたものが必要だということと、社会と接点を持つというのが特に必要であるとお聞きしました。

例えば障害者の雇用に熱心に取り組んでいる企業を、東京都としてリストアップして、

そういうところと連携しながら、発達段階に応じた、個々の個性に応じた体験プログラムを一緒につくっていくという方法があると、直接の仕事にも結びつき、そして社会とのつながりというものも見えてくるものができ上がるような気がいたします。

**【村上部会長】** ありがとうございます。

そうですね、実際に雇用されている企業であれば、どういう社会的スキルが育たないまま卒業してきているのかなど具体的に知っているわけですね。そういうことを出していたきながらプログラム開発をすることが求められているということですね。

ほかには、いかがでしょう。

正に我々が審議してきたコンソーシアムの役割というのは、資源をつないでいく役割というのがとても強いと思います。そういう視点で考えると、専門部会の中には特別支援学校を専門に関わっている人間はおりませんが、ニーズをつないでいくという視点で言えば、我々の中でも議論するポイントというのは、正に生重委員がおっしゃったようなところであるなと思われま。

特に教育的なプログラム、体験プログラムを協働してコラボレーションで開発していくノウハウみたいなものは、生重委員を始め皆さんが非常に強くお持ちですので、そこに障害のある方たちの雇用に関わってきたような人たちがつながっていくお手伝いをするというようなイメージが今の意見で見えてきたかなと思います。

では、どうでしょう、ほかに、是非この点については述べておきたいというような御意見はございますか。

どうぞ。

**【古賀委員】** 特別支援ということに関してですけれども、障害というものの考え方というのが少しずつ変化してきていると思います。今もお話があったと思いますが、個性というか、従来の聾・盲・養護という3分類から、もう少し広がりがある、あるいはマージナルといいますか、境界的などといいますか、例えば発達障害というような非常に難しい領域も、ここに入ってくるようになっていきます。

発達障害も、実は我々、「サスペクト」つまり疑いがあるという言葉で表現しているわけですね。発達障害だと断定はできないと。医学的、心理学的にどうそれを判定するかというのは、まだ依然議論があるということで、つまり、非常に緩やかに障害というものを考えないと、現実の今の障害というものを持っているお子さんたちには対応できないということがあるかと思っています。

ですから、今、生重委員からお話いただいたことというのは、例えば障害児学校の高等部を設定していくときに、体験学習というのを非常に強く入れたり、それからお話が出ましたけど、障害者雇用促進ということで、やってきたことが一方ではありますが、同時に、今お話ししてきたように緩やかな障害というか、そういう要素を持った人たちへのプログラムということも、これに絡んでくるように思います。

そこでは今度は、ある種の社会的スキルが極めて欠落するというような、全体に同じような量の社会的スキルの問題ではなくて、あるゾーンだけ非常に乏しくなるというようなこともありますから、それに応じた設定ということが非常に重要になってくるのではないのでしょうか。

今もお話ししましたように、高等部レベルではもう一定のノウハウをお持ちだと思うので、そういったものを教えていただきながら、そこに、今お話しした緩やかな障害を持った子供たち向けのプログラムを更に加えていって、この後出てくるような、いわゆる障害とは言えないけれども、セカンド・チャンスが必要とするような人々へ、緩やかにそれがプログラムとして接続されていくというようなことが必要になってきているのではないかと思いますので、付け加えさせていただきました。

特に発達障害の問題は、非常に重要であると思います。

**【村上部会長】** ありがとうございます。

はい、松澤委員お願いします。

**【松澤委員】** 私どもの学校は専門学校ですが、ITを中心にしております。

私自身が障害のある子を、卒業させました経験があります。

大変優秀で、卒業はしましたけれども、生重委員が言われたとおり、その後ですよ。教育はできるのだけれど、また、そういう子のほうが大変に集中力が高いので、学科の一番トップになった子もいたぐらいで、大変優秀ではあったのですが、その最後のところの就職先がなかなか見つかりませんでした。

大変立派なSEになって今も働いている方もおります。このようにIT系であれば、道さえつくっていただければ私ども、教育は十分にできると思っておりまして、先ほどのネットワークがうまくできるといいと思いますね。

**【村上部会長】** ありがとうございます。

お二人のお話を聞いていると、何か境界線を引いてしまって、そこに特化したようなことばかりを考えるのではなくて、やはり連続している、境界線であるようでそうではない

ものという認識のもとにやっていくということと、やはり出口となる社会の側とのつながりを同時につけていけるような、スキルを育てるだけではなくて、社会とのつながりを増やしていくような、そういう取組が求められているということで理解させていただきました。

ありがとうございました。

それでは、まだ幾つか協議をさせていただきたいので、先に進めさせていただきます。

では、先ほど申しましたが、セカンド・チャンスについても、資料4-1のところの一番下で示していただいているようにまだ話し合われていないので、御意見をいただきたいのですが、このことについては、少し古賀委員のほうから、課題提起でも結構ですのでお考えを伺いたいと思います。

**【古賀委員】** 私もセカンド・チャンスを必要とする方たちを非常に見てきたわけですが、実際に仕事に出て、現実の厳しさにぶつかった後に課題が見えてくるというタイプの方が多いですね。ですから、あらかじめ頭で、こういう問題があるから解決しなさいということを言われても、なかなか実感として理解できないところがあります。

そういう意味では、社会の中での体験を一つの資源として使いながら、学校のほうでその問題に応じていくような仕組みというのが要求されているのではないかとこのころがあります。

一つ重要なのは、この専門部会の最初のお話したのですが、多様なレベルの資格とか技能を求める声というのは依然として強いものがあります。

これについては、つまり専門学校に通う場合は、ある程度資格を取りたいということで通っているかと思うのですが、その手前ですね。何を取ったらいいだろうとか、どんな技能があったら有効と言われるだろうとか、あるいは自分には何が合っているだろうとか、この辺のところの立ちどまりというのが、社会の中で失敗を経験した後、非常に深まっていくということがあると思います。ですから、その相談をするという部分の機能ですね、これが一つ重要ではないでしょうか。

つまり、多様な情報を提供してもらって、相談に応じていくような機能を持たせることが重要です。その方法論は、別にフェース・トゥ・フェースだけではなくて、今、多くの学校が、校内放送よりメールを送ったほうが生徒は早く先生の所に来ると言っていますので、そういうIT的な条件でも結構だと思うのですが、情報提供の局面をつくっていただくということが、まず一つあります。

それから、今のは資格とか技能の問題ですが、もう1点、私が、様々な子供たちと接してインタビューしていると、やはりある種の心の悩みというのでしょうか、様々な問題にぶつかったときに傷ついてしまって、その後それがリカバリーできないという心理的な問題があるように思います。

これは、やはりある程度カウンセリング的なものが、フェース・トゥ・フェースで要求されているように思われます。これはすぐ答えは出ないでしょうが、ある種の相談者というのが要請される局面かなというように思います。

例えば高校ですと、保健室に行く子供たちによくこういう症状が見られます。つまり、余りダイレクトに、問題が明確にあるわけではないが、ちょっと頭が痛いとかおなか痛いというようなことがあります。

大人もあると思うのですが、子供の場合はそれが先鋭で、特に原因がはっきりせず、何をというふうにならない。もやもやと嫌だとか、困ったとか。これをある程度受けとめてもらうような、先ほども言ったカウンセリング的な場として、もう一つ要求されるものが学校にあるように思います。

ですから、先ほど言いました、資格の情報提供機能と、心理的な相談機能の二つを学校の中に置いていただき、それを在学中とかあるいは卒業・中退してしまった後も、何かアクセスできるような体制をつくっていただくと、多くの子供にとっては、すぐセカンド・チャンスとはいかないと思いますが、セカンド・チャンスの入り口的なことが考えられるのではないかと思います。

3点目は、労働法教育とか、労働環境の問題、就労環境の問題があります。

いろいろ聞き取りをしていますと、全ての企業が適正な労働環境を提供しているとは、残念だけど言い難いようです。やはり過酷なものがあったり、それから、身体的な障害を生み出すようなケースもゼロではないようです。

こういったものも、いわゆるハローワークなどとは別な意味で聞き取ってあげて、一回吸い上げて、企業さんのほうにあるいはハローワークのほうへ返してあげるような、要するにまとまらない気持ちをまとめてあげるような、そういう作業も、三つ目には必要とされていくのではないかと思います。

今挙げた3点を学校の中で、どういう形がいいのかというのは別の議論として、提供していただければ、大変多くの中退者や就業未定者、あるいは離職者など、いわゆるフリーターとかニートと呼ばれてきた人々の中でもより過激な層にアクセスすることができ得る

のかなと思います。

私の実感ですけれども、恐らく10人のうち1人とか、20人のうち1人来れば成功というように、残念ですけど、数的にはなかなかヒット数は多くならないのかもしれない。

なぜかといいますと、学校のほうである程度提供して待つという形を前提にしているとすると、つまり外へ追いかけていって彼らをつかまえて何かするというのでないとすると、やはりヒット数はそんなに多くはならないだろうということです。ただ、それでもあるのとないのとではセーフティネットとしては随分違うという、こういう考え方になるのではないのでしょうか。

**【村上部会長】** 松野さん、今の古賀委員のお話なども聞いた上での感想でも結構ですし、または、我々がこれから本審議会でも議論していきますので、卒業後のセカンド・チャンスの問題について、現場では高校をどのようにとらえていらっしゃるか、現場の立場から少しお話が伺えればと思うのですが、いかがでしょう。

**【松野氏】** 私どもで一番難しいなと思うのは、彼らを把握し続けることです。中退や卒業後も追いかけていく形であっても、難しさが残ります。

あと、やはりその子の周りの環境を配慮する必要があるのかなと思います。家庭環境、交友関係、さまざまな環境があるとは思いますが、そういうものに引っ張られやすい年代の子たちだと思うので、いかに親身になれる、添って歩いてあげられるようなサービスになるかが一つポイントになるのかなというふうに、今お聞きして思いました。

**【村上部会長】** なるほど。よく若者同士のピア・サポートの話なんかを伺うと、今、松野さんが言った「親身になる」、それから「寄り添う」とか、そういうキーワードが一番大切なポイントとして出てきますよね。ありがとうございました。

では、こういうお話も含めて少しフリーに、この点について、ほかの委員の皆さんからも御意見をいただきたいと思います。どうでしょうか。

**【生重委員】** 平賀委員のところのプログラムだと、すごく巻き込み型で、こういう方たちがもしキャッチできたら、巻き込まれながら自分の居場所ができるというか、人間関係がつかめるような気がしますが、どうなのでしょう。

**【平賀委員】** 不登校の子たちが集まっているある高校で、「ヤングアメリカンズ」というアメリカの非営利団体が3日間で歌やダンスのショーを作り上げ発表するという教育活動に、先日取り組みました。初日やると、もう疲れてしまって翌日来ないとか、またとてもつらいのでパニックになってしまうとか、そういう予期せぬことはいろいろありまし

たが、「ヤングアメリカンズ」の人たちというのはあきらめずにずっと付き添っている。ずっと寄り添うというのを続けるわけです。

多分、英語と日本語なので、言葉は全然通じていないと思いますけれども、とにかく手をつないで「大丈夫、大丈夫」、「舞台に立つことが大切なんだ」と励まし続けたことで、最後にはすごい感動のステージが生まれました。やはり本当に親身というのは、私は寄り添う、あきらめないことだと思います。

もう一つは、先ほど古賀委員がおっしゃっていたセカンド・チャンスの一つ目と二つ目、つまり社会に出て仕事の現実の厳しさにぶつかって戻ってきたときに、資格の機能と、もう一つはカウンセリング的な機能が必要とおっしゃったんですけど、これはもうほとんど同一に考えるべきなのではないかと思います。多くの子たちは、自分の経験というのを正しく振り返れないところがあり、だから、例えば失敗すると、何がいけなかったかを考えずに、ただむやみに落ち込んで、自分はだめだっていうふうになっているのではないのでしょうか。

多くの大学生の就職活動も同じだと思います。会社に落ちて、もう何か「自分はだめだ」みたいに思ってしまうというような例が見受けられます。エントリーシートとかを見ている、自分の経験というものをどうとらえているのかというと、どうも間違えているのではないとか、それは違うと思うことがよくあるのですが、自分の経験を正しく振り返って、自分の得意・不得意というものや、志向や、行きたい方向というものをセットで考えないと、多分その資格の情報にまで行き着かないというように思います。

そういう役割を本当は先生ができればよいと思いますが、実際は難しいと思われれます。だから、これらの機能を学校に置くといっても多分、ある特定の、そういう分野の専門の人がいないと厳しいと思いますね。

**【生重委員】** ある中学校では、保健室とは別に部屋を用意して、大学の心理を学んでいる学生さんたちに週に2回ほど来てもらい、そこで話を聞いてもらったり、また本や机も置いてあり、本を読みたければ読み、勉強したければそれもできるというように、その学校に来れなくなって教室に入れなくなった子が足を向けられる環境をつくっています。

それと、その学校の中には不登校の子が別の玄関から入れるような、「ステップアップ教室」と呼んでいますが、自分の学校とは関係のない、学校に来れなくなった生徒さんたちが来れる環境もつくっています。

それは教育委員会の施策の一環としてそういうものを設けているのですが、たしかに、

学校の教室に入りづらいなというSOSを発している子供は、教室とは離れた場所でない  
と、学校には来れないというところがあります。

**【柳委員】** やはりその直前で踏みとどまってもらいたいという思いがありますので、  
私の学校でも今年から大学院生、臨床心理士の卵みたいな人に月に2回ぐらい来てもらっ  
ています。するとやはり、そこにそういう人がいるということで、特にアドバイスは願  
いせず、ただ、話を聞いてほしい、会話をしてほしいというお願いだけなのですが、それ  
でも生徒は相談に行くんですね。

それで、結構立ち直るといいますか、休まずに学校に来て、「次はいつ来るの」と楽し  
みにしている生徒もいます。本当に重症な生徒は病院にかかったりしていますけど、その  
直前の生徒たちが、それで結構学校を続けられているというケースが何件もあって、やは  
り年代の近い先生と話ができて、共感してもらえるとこのところ、すごく効果的だと思  
います。

それから、もう一つ、ある学校ではやはりカウンセリングルームがあって、普通の教室と  
は違うやわらかな環境がつけられていて、そこには生徒は通ってくるのですけれども、今  
度はそこから出るということが、一つまた次のステップになってしまうのですね。

そこがまた考えていけないといけないところで、うまく教室に戻れたのにも関わらず、  
卒業し、大学にも入ったけれど、そこでまた難しくなって、同じことの繰り返しになっ  
てしまう生徒もいるので、その段階段階でふさわしいプログラムというのを用意しておか  
ないと、1つできたからといって、それだけでは難しいと思います。

**【村上部会長】** 今までの議論を整理させていただくと、二つ方向性が見えてきたよう  
に思います。

一つは、段階があるということです。つまり、児童・生徒が自分のことを客観視する意  
味でも、まず話を聞いてもらうことから始める必要がある。それは、多分1対1の関係で、  
寄り添ったり親身になったりというところから始まるのでしょうが、その次のステップと  
して、今度は集団の中で、何かを達成していくということの体験というのでしょうか、そ  
こへステップを徐々にシフトしていく。つまり、カウンセリングルームから、教室に戻る  
のか、それとも少し社会的な居場所のほうに行くのかはケース・バイ・ケースなのでしょ  
うけれど、そういうステップが一つありますね。

そういう段階の問題と、もう一つは、予防的な話として、やはり深刻化する前からいか  
に対応するかということがあるのですが、ただ、これから少しまだ御意見が欲しいなと思

うのは、その予防という観点と、それからもう卒業してしまって、よりどころを失ってしまっただけになっている人たちとどうつながっていくかという点が、セカンド・チャンスの大事なポイントではないかというところまでは、皆さんの御意見で、見えてきました。

そこをどうつかんでいくのかというのが、もう少し御議論がいただけると、施策の方向性もより見えてくるかなと思いますが、いかがでしょう。

**【生重委員】** それにプラスして、できれば体験値が少ない子が自分の生き方に自信を持ってないという傾向があるので、先ほど申し上げたような、個に応じた体験のようなものも積める仕組みがあるといいと思います。クレイアニメとか、アニメーションの下絵描きとか、ものづくりとか、そういうことこそ、専門的教育人材を活用することで、より良い出会いが生まれてきますので、このコンソーシアムの価値がその部分で生かされると、ますます汎用性の高いプランになっていくのではないかと思います。

**【太田委員】** 話を聞いていて、少々わからないところがあります。一つは、この中退とか、いわゆるドロップアウトですが、やはり基本は、なぜドロップアウトしたのか、その原因除去がなければどうにもならない話で、それで、現実にはドロップアウトしている人がいるからその人たちをどうするかという、この二つの局面というのがあると思います。

それで、ドロップアウトも様々な原因があるのだらうと思うのですが、例えばドロップアウトでも、一生懸命働きたいと思ってドロップアウトする人もいるでしょうし、極端な例でいえば、進んでアンダーグラウンドの世界に入っていこうというような人たちもあり得ます。そういう人たちに対しても、これは何かをやらうということなのでしょうか。

様々な生き方をしている人たちを全部個性というふうに捉えたときに、我々がこのコンソーシアムというところが対象とする個性は一体何なのかという、その部分をもう少し議論する必要があるのではないのでしょうか。

**【村上部会長】** まず一つは、傾向としては、ドロップアウトというのではなくて、社会的に退却してしまう、つまり、社会から引きさがってしまう、原因はいろいろでも、結果としては引き下がるという状況で孤立するというのが、この高校中退者、進路未定者の中でも、現代においてはかなりウエートが大きくなってきています。我々の議論は、要するに社会的な退却によって孤立に陥るといった人たちが、現代において非常に増えてきたというところに、やはり焦点を当てる必要があると思います。

【太田委員】 もしそうだとすると、例えば先ほど古賀委員がおっしゃったのも一つの手段だと思います。言葉が適切ではないかもしれませんが、いわゆる「ドロップアウト」が生じないようにするためには、学校の中にどういうふうな機能を持たせるのか、つまり、その機能に対してこのコンソーシアムはどういうサポートができるのか、一つ、そういったものがあると思います。

それから、また一方で、もう既にそういう人たちがいるわけですので、その人たちがどこにいるかわからないのであれば、まずどこにいるかを把握しない限り、どうしようもないわけです。

その人たちに、さっき平賀委員がおっしゃっていたように、しつこいくらいに熱意をもって愛情をもって、つながりを求めようとする人たちがいなければいけないわけです。そうでないと、1回は来たけど、2回目、3回目は来ないとか、もうそこからまたぷつぷつとつながりが切れてしまいます。それならば、そういう仕掛けはどうやってつくるのだろうかというところで、そこまでをただ今の議論の流れとして理解すればよろしいでしょうか。

【村上部会長】 大丈夫です。太田委員に今言っていたことで、我々も整理されました。

【古賀委員】 太田委員がおっしゃっているように、やはり学校の中にまずどういうものを組み込むか、そのときにここでやれることは何かという、もうその点だけだといえると思います。

ただ、中途退学者の出る学校と出ない学校には、はっきり色分けがあると思います。

大阪の事例で見ると、はっきり言って10%以上の中途退学者が出る学校というのはほんの一握りです。ほとんどが5%に満たないです。日本の中途退学の率全体はせいぜい3%ですから、極めて低いですね。アメリカは大体30から35%です。ですから、そこから見たら10分の1です。しかし、日本の場合あるゾーンだけ、突出しています。その原因が非常に重要だと思います。

僕は、宮城で調べたときに、実は二つか三つの学校が20%近い中退率になっていて、その一つは、商業高校で、就職率は悪くないのですが、男子だけの高校で、20%以上の不応率になっているという、そういうことがありました。

その学校はリニューアルしまして、情報科を入れたりして、内容を変えていきました。だから、同じような作業が必要かもしれませんね。つまり、そういうことを言うと非常に

恐縮ですが、やはり中途退学者の多い学校には、中途退学者が出やすい条件というのが何かあるように思われます。それは先生方の熱意とかではなくて、仕組みとして、余りうまくない、子供にフィットしない学校というものが。さらに言えば、相談とか情報提供とかそういう部分でも極めて親身じゃない、あるいは寄り添ってくれない、というような要因があるのではないのでしょうか。そこを特化して理解するということが、まず一つ要るのではないかと私は思います。

それから、同じことで、進路未定の卒業生が出やすい学校も、ランクが低いからみんなそうなるかという、そうとは言えないと思います。これはやはり進路指導、キャリア教育を担当する先生方のいろいろな情報へのアクセスだとか、あるいはフィットできる情報提供の形をよく知っておられるかとか、そういうことに非常に引っ張られていると思います。その辺りが偏っているように思うので、まず、偏っているという事実を把握して、なぜ偏るのかということから考えていく必要が本当はあるのではないのでしょうか。

さらに言えば、ドロップアウトしてしまって一度学校を離れた人は、余り学校が好きではないので、再び支援の手を学校に差し伸べてほしいと言うというのは、なかなか難しいと思われます。

ということは、逆に言うと学校に入ってきたときに、卒業とか、中退で仮に学校から離れても、こういうふうにしてあげますよというプログラムを、その学校の中でまず傳達するというのが一つの段階で必要であるということと、かつ、今お話があったように、例えばジョブ・カフェなど幾つかやっておられる、そういう人たちを集めた居場所型のところで、もう一回そういう情報を与えて、自分のアクセスしやすい場所に行きなさいと伝えてやる必要があると思います。

つまり、非常に困難性の高いところをまずある程度特化して改善するという作業と、フォローアップ情報を在学中も、それから在学後も提供できる体制を整えるという2点が、非常にまずは重要になってくるのではないのでしょうか。

**【松澤委員】** 不登校又は引きこもりという子たちを集めてきているサポート校は、そういったところでの経験なり教育の仕方なりというノウハウの蓄積があるようですので、そういう方々の御意見は、こここのところの施策には大変有効だと思います。

**【村上部会長】** ありがとうございます。

正に古賀委員がおっしゃった、在学中から、その学校を離れても、また別な形で学校とつながれるとか、それからその子に適した社会的な関係のルートを在学中からつくってい

くような取組は、松澤委員のおっしゃるサポート校なども一生懸命にやっておられるので、そういうところもモデルにしながらこの施策を考えていくということが、今見えてきたかなと思いました。

どうぞ。

**【生重委員】** 古賀委員がおっしゃる高校の現場のミスマッチ、現代社会とのミスマッチということもそうなのですが、それ以前に、中学の進路指導のやり方にも課題があると私は感じています。

とにかく入れるところに入れてしまう、しかしその先の高校卒業時になって進路未決定という子が出てきてしまう。やはりそうなる前のところが大事ですので、子供たちが個に向き合う仕組みが、コンソーシアムの組織ができ上がった段階で生まれてくるといいなということと、それとは別にネットワーク協議会の中では、もっと多様なキャリア教育が行われることによって、自らの意思で選んだ学校に入っていくような子を高校に送り出せばと思います。

**【村上部会長】** ありがとうございます。

**【太田委員】** 今のお話に追加していいですか。

**【村上部会長】** はい、どうぞ。

**【太田委員】** 生重委員がおっしゃるのは、正にそのとおりだと思います。そういう面から言いますと、柳委員がいらっしゃいますのでお伺いしたいのですが、もしかしたら高校のいろんなカリキュラム自体が、やたら平板なものになってしまっているといえますか、もっと多様な選択ができるようなものが必要ということはないでしょうか。普通科高校はほとんどが大学に進学するというを前提として、そこにウエートが置かれ過ぎていて、何か枝葉の部分がみんな切り落されてしまっているという可能性はないのでしょうか。高校の現場におられる方としては、その辺りのバランスについてどのようにお考えになっているかお聞きしたいのですが。

**【村上部会長】** ただ今のお話については、実は柳委員の学校は単位制で非常に多様というかフレキシブルなカリキュラムが組める学校でして、実は私や平賀委員が今のこの審議会での御提案を先取りする形で関わらせていただいているような動きもございますので、後ほど時間をいただいて、御紹介したいと思います。

さて、議論のほうで、始まりのところのセカンド・チャンスということだけではなくて、学校の中にどのように、こういう支援を位置付けていくとか、そういう部分にも入って

まいりましたので、ちょっとお許しいただいて、次の話題に進んでいきたいと思ひます。

資料4-2に、入りたいと思ひます。専門的教育人材の活用方策ということで6点、関わり方のクオリティの部分の違いみたいところで分けて御提案いただいている部分がありますので、これを見ていただいて、この専門的教育人材、特に企業ですとかNPOの人材が、現行の学校の中の、例えば商業高校などの専門教育の学校が忙しいとすれば、ではどいう形で入のかとか、そういうことも含まれますので、そちらの御意見をいただきたいと思ひます。

【古賀委員】 基本的な疑問なのですが、専門的教育人材というのは、企業、NPOで一定の何か特殊な技能を持った人というように、もう位置付けてしまうということですか、これは。

【村上部会長】 この六つの分け方でいうと、例えば1番の「奉仕」や「産業社会と人間」に関わるということになれば、それに応じた専門的な人ということになりますし、逆に、「キャリア教育」プログラムのゲストティーチャーなどは、一定のクライテリアという条件があるわけではなくて、逆に「キャリア教育」を、一定のものではなくて正に自分が持っているもので勝負するというように、各段階によって求められる人材が違ふと思ひます。

【古賀委員】 先ほど柳委員がおっしゃっていたような、何かある種のメンターというか、そんなに技能は高くないけど、若くて活力があつて、いろいろな話を聞いてくださるという方というのは、カウンセラーではなくて、アドバイザーというほどアドバイスもしていないかもしれないけれど、生徒にとっては、とてもなじみやすく話を聞いてくれる、あるいは、自分の経験談でもってレスポンスしてくれるという方、この一番下の人材には入ってくるということですか。

【村上部会長】 今の段階では、ここに示されているのは、学校に外から入るとすれば、教科や科目ですとか、そういったところに食い込んでいくような道筋を想定して提案されていますけれども、しかし一方で、今の古賀委員や先ほどの柳委員の事例の紹介などからすると、必ずしも教科から学校に入っていくというルートだけではないというところはありますよね。

【古賀委員】 そういう意味では、ずっとお話にあつたように、何か「専門的に」は余り小さくとらえないで、要は学校にとって専門的と見えればいいということでしょうか。

【生重委員】 そうですね。ここでの特別非常勤講師は、何かの技能を持っている人に

限定してというよりは、多様な生き方をしながら企業にいたり、それから自分でいろいろやっていた方たちが、すでに持っている資格を活かしたり、自分は高校に関わりたいということで講師養成研修を受講して下さって、そのための資格が特別に授与されるというイメージですね。

**【村上部会長】**　そして、そこでの研修・講習というのは、恐らくその方の持っている専門性を高めるのではなくて、その方の持っている専門性を学校教育現場で生かすための方法論とかスキルとか、そういうものだろうと思いますけれども、それが何なのかということは議論しておく必要があるかもしれませんね。

**【古賀委員】**　そういう意味で言うと、さっき平賀委員がおっしゃっていたのは、自分の経験を振り返るといふようなところで、曖昧模糊としている段階のところをサポートしてくれる専門人材と、「いや、やっぱり資格を取ることに決めました。こういうことをしたいんです」といふときに、きちんとサジェスションをしてくれる人というのがやはり違って、後者は、例えば先ほどお話が出た専門学校先生方とか、キャリアアドバイザーの先生方とか、全体の職業構造みたいなものを理解されて道筋をつけてくださる方でないといふことになるように思いますね。

ですから、そういう意味では、入り口的な非常に漠然としたところを受ける部分の人材と、いや、もう少しはっきりとある程度方向性が決まってきた、次には社会集団の中でいろいろな活動をしてみたいと、あるいは、することに意義が明確に見出せたという人たちに向けてやるものとは、おのずと人材の層も違ってくるのかなといふふうにお聞きして思います。

**【松澤委員】**　正に専門学校では、そこがポイントになりますので、やはり資格なり技能を持たせて、社会が必要としている人材に育てようとしています。だから、その前には、社会がどんなことを今要求しているか、企業はどういうことを必要としているかということ、専門学校の場合はわかっておりますから、まずそこを教えるから技能なんですね。そういう面では、後者のところに対しては正にこれは専門学校の各部署が担当できる部分ではないかと思えますね。「奉仕」のところはわかりませんが。

**【村上部会長】**　専門人材については、これまでもかなり議論してきた部分もございますので、これも絡めてでも結構ですが、区市町村のほうの地域教育支援、地域教育の学校支援というような部分を少し御意見をいただいております。

こちらは、ネットワーク協議会ということで、継続的に発展していく部分になります。

**【古賀委員】** こちらのほうは、組織としてはもう既に持っているものが多いですね。相談員はバスケットで言うマン・ツー・マンだとすると、こちらはバスケットで言うゾーン・ディフェンスみたいなもので、小さい学区をゾーンとして持って、その中での課題に対応していくというやり方ですね。

**【生重委員】** ネットワーク協議会はもう既にかなり発展的な形で動いていて、前回の東京都庁の大会議場を使ったコーディネーター・フォーラムのときも約400名くらいの参加者があって、今までにはなかった地域にもコーディネーターが学校支援という業務の中で生まれてきています。あとは、資料4-3にある新たな二つの機能である、企業人等が教育支援人材として活躍する機会づくりと企業等が開発した「教育プログラム」に関するチェック機能をもっと発展的に進めることが課題です。ただ、今はもうホームページのほうでの発信もかなり充実していますし、活用している方たちも増えてきていますし、そこにエントリーしたいという企業さんも増えてきていますので、その辺りの情報を発信・共有し、あとは、コーディネーターたちが勉強しながら、自分たちの地域の学校に合ったものを紹介していくということかなというふうに思いますし、プログラムに関しても同様だと思います。

**【村上部会長】** あのフォーラムの場に私も参加させていただきました。非常にたくさんの方々の企業が来られていましたよね。あの集まった企業の方はここにはいませんが、あの方々のニーズというところのどのようなものがありましたでしょうか。

**【生重委員】** ブースを出しているところは、もう明確にプログラムをお持ちで、そのプログラムで学校とつながりたいということです。企業側には学校にうまく入れないという悩みも多いようで、学校側として何をやりたいか、何に興味があるかという当日の参加者アンケートを活用するなどして、なるべく学校現場が困らない、欲しいと思ってくれるものにアレンジして学校と出会っていただくというのが望ましい姿かなというふうに思っております。

**【村上部会長】** 太田委員もいらっしゃっていましたが、太田委員の立場から見て、先日のフォーラムの場で企業の方たちを見ていて、どんな感想をお持ちでしょうか。

**【太田委員】** いや、本当にこんなに広がってきたのかというのが、もう率直な感想です。この流れというのは多分広がる部分は間違いなく広がるでしょうけれども、企業がコミットしていく場合のコミットの程度が、どの程度になっていくのかというのが若干気になっています。

【古賀委員】 やり過ぎてものというの、一つ気になるということですね。

【生重委員】 やり過ぎるぐらいには、学校は入れさせてはくれません。それは学校教育における小・中の時間数の中で、そんなに「どうぞ」というほど時間は絶対にもらえませんが、それに、丸投げはあり得なくて、学校の教育課程に乗って、その中できちんと体系化したプログラムとして入っていくということですので、5時間、10時間ということはずありません。

【事務局】 事務局のほうからも御意見を伺いたいのですが、学校支援地域本部、都では学校支援ボランティア推進協議会とっておりますけど、実際に取組があるのが21区市でございます。

学校支援ボランティア推進協議会事業を通してコーディネーターが生まれたところには、企業等との交流の機会というのはそれなりにつくってはいるのですが、それ以外の地域にそういう企業のプログラム等を広げていくと考えたときに、区市町村の教育委員会の理解の問題なのか、違う要因があるのかわかりませんが、地域で受け皿をつくれない場合に、企業等とのプログラムが入れにくいというようなことも出てくる場合がございます。

その壁というのを打ち破る方法はないか考えてみたときに、例えばそういうことが広がっていない地域の学校で、学校の校長先生とか先生たちがそういうプログラムをやりたいといったときに、どういうふうに関わっていったらいいのかというような観点で、少し御意見をいただければと思うのですが。

【生重委員】 私どもでは、全然関係ないエリアからでも、例えば日立ユニバーサルデザインというプログラムなどは全部うちが窓口を担っています。平賀委員のところの銀行体験プログラムも、平賀委員のところの窓口になっています。そういう窓口になっているようなものをリスト化して御紹介するというのも、一つの方法でしょうか。そういうリスト化や、ホームページでの御紹介が有効ではないでしょうか。

問合せはよくいただいております、学校に学校支援ボランティア推進協議会のような組織はないけれども、PTAが必死になって探していて、電話やメールなどをいただくことはあります。

だから、どこからでも、東京都のネットワーク協議会のホームページを見たら、いろいろなところの窓口がわかるようになっていっていると学校も活用できると思います。

【村上部会長】 要するに、我々のこの審議で言えば、地域教育推進ネットワーク東京

都協議会と、そこに連なるコーディネートをする生重委員たちのような団体がもっと前面に出て、企業の持っている資源と、いわゆる区市町村の小学校・中学校、義務教育段階の学校の支援窓口として機能を強化するということで、それがあれば、例えば積極的にPTAに手を挙げていただいても、企業とうまくマッチングすることは可能性があるということでしょうか。

**【生重委員】**　そうですね。ただ、PTAの場合、ただイベントのように企業を入れることに価値があるわけではなくて、小学校・中学校においては、体系付けられたプログラムと、学年ごとの発達形成段階における出会いが必要なのであって、それをわかってやっていただけるのか、また学校側にもそれをきちんと説得できるのかというところが心配です。ただ、一覧があって、相談に乗る窓口が東京都のネットワーク協議会の中に例えばつくれるのであれば、そこからうまく、窓口になる団体等が相談に乗って、つないでいくということができると思います。

**【村上部会長】**　わかりました。

今は区市町村における地域教育の取組の活性化という文脈で御意見をいただいていたのですが、ここで芦花高校での新たに始まった動きについて御報告いただこうと思います。

何がキーワードかというところ、学校の教育体系の中に、外部の人間がアドバイザーとして入って、学校の教育体系の中で、体験等の様々な、例えば先ほどのキーワードで言うところ「自分を振り返る」とか、いろいろなことが仕込まれていく。そういうことをやりつつあるということで、柳委員と平賀委員から、現在のところの我々が関わっているこのプログラムづくりについての御紹介を、委員の皆さんにさせていただけますでしょうか。多分、小・中学校段階にもつながる話になると思いますので。

**【柳委員】**　まず、ここでいろいろお話ししているとおり、やはり生徒たちは、自分の好きなことには意欲を持ってやっているけれども、今やっている勉強がどういうふうにつながっていくのかとか、それから社会に出たときに本当に自信を持って自分の道を進んでいけるのかというところには、なかなか疑問があると認識しておりまして、それを突破するには何が必要なのかというところから検討を始めたということです。

それから、うちの学校は単位制です。単位制に来る子供たちというのが、普通科の学年制の中には入り込みにくく、単位制のところに来ればもう少し違う教育が受けられるのではないかと、もうちょっと自分らしくできるのではないかと考えて来ている子が、割合的には多いと思います。

また、まじめに勉強しているけれども、本当に力がついているのかとか、本当に社会と交わっていけるのかというところでもすごく疑問があって、そこを突破していくのはやはりキャリア教育ではないかというふうに私は思っています。

それで、そういうことを学校の中でも話しながら、今は、総合的な学習の時間では、1年次はキャリアガイダンスという授業と奉仕でやってきていまして、2年次のほうは、本当に調べ学習のような形で進路につなげる学習を4単位分やっておりますけれども、その部分をもう少し組み替えて、キャリアというところに視点を置きながら、卒業後とか社会に出たときに自分らしく生きていけるような、そういう子供たちに育てていきたいと思っていたところです。

たまたまこういう審議会に入れていただいてお話を聞かせていただいたところで、そういうことにいろいろプログラムをお持ちの方々がいらっしゃるの、御相談をしながら、そこに総合的な学習の時間、2時間分のもを一緒に開発してもらえないだろうかという御相談したのが、きっかけでありました。

そして、去年の秋ぐらいから少し相談に加わっていただきながら、今、全体的には2回、会を持たせていただき、まず1年次でどういうふうに1年間のプログラムにしていくかということで御相談をしているところです。

**【村上部会長】** こちらから提案している内容について、概略をお聞かせください。

**【平賀委員】** 柳委員からそういうお話を伺って、私たちはそのプログラムを考えると、どういう体験とか、どういうことができるかとかを考えました。そこで社会に出るということを前提にしたときに、基本思想とかそういうものはどんなものかなというときに、考えたのは、未体験のこと、未体験のものをやる、体験し続けるということです。

結局、社会に出たら、初めての人との関わり、初めてやる仕事など、初めてのことをずっとやり続けるわけで、そういうものに慣れるということ、あと、みんなでやり切るという体験を入れて、その協力する中で、相手も認める、自分も自分らしくその中で役割を全うできるという経験をさせて、やり切ったことでの達成感とか自信とか、そういうものが得られるような、そういう方向でプログラムを考えていきました。そして、やる気のある若者とか大人というものに出会う機会をいっぱいつくったらいいいのではないかと考えました。

単位制高校において総合的な学習としての継続的な履修を大前提としながら、そこで考

えたのは、様々なプロフィールを持った若者とか大人に会うような機会をいっぱいつくって、刺激を受けてやる気になっていくというようなプログラムです。前半戦は夏休みの奉仕の中の一環で、いろいろなボランティアを選んでやっていこうということですが、そういうところに様々な出会いを組み込んでいたり、例えば職業人インタビューみたいなものがどこにでもありますが、そうやって自分で会いたい人に会いに行くということも入れています。参考資料6を御覧ください。これは世田谷総合高校でつくったものですが、これは代表的な原稿を有志の子たちが選んで作成したのですが、こういうのも結局、勇気を出して、まず会いに行くということが全てです。

それと含めて、どれだけ気づきの量が多いのかという、結局そこだと思います。体験をするだけでは結局だめで、どういう気づきをそこで彼らに与えたいのかという、働くということに対してどんな変化を与えるのかというようなところを考えて、プログラムをつくってみました。この「MESSAGE」というこちらのところにある、これは高校生たちが考えたのですが、この職業人インタビューをして感じたことというのを紹介すると、「おもしろい仕事をするもしないも、いい仕事をするもしないも、仕事を楽しくするもしないも、全部自分次第！」とありますが、そこに気づいたという、そういうこととかをここでメッセージにし、この一番大切な部分をここで共有できる、そういうことも入れたりしています。

あとは、誰かの役に立つということがやはりすごく大切なのではないかなと。役に立つ喜びみたいなものを、例えば銀行さんを使ったプロジェクトで全校でやってみようとか、あとは、新しく入ってくる新1年生の交流会を自分たちで企画して、45分間、自分たちの学校の紹介みたいな形でやってみるといような、そういうような形で、チームでやる、まただれかの矢面に立つ。そして、そこで評価を受けるということをやっけいこうというものになります。そして、大学生をその中にアドバイザーとして入れていこうとも思っています。

**【村上部会長】** 2年生になると、いわゆる科目の履修選択を決めなくてはいけなくて、特に理系であるとか文系であるとかの、将来の仕事にもつながる決断を高校の1年生で迫られるので、実際にその決断をして大学に行っている大学生が、生徒たちとしっかり対話することによって、履修選択の考え方みたいなものも伝わるような仕組みを授業の中に入れてながら、その大学生たちが、奉仕の体験活動であるとか、職場インタビュー、職業人インタビューなどの活動のまとめの作業に加わって、次の年の入ってきた新1年生に伝えて

いく場面などにトータルに関わっていくような、そういう1年間の教科としてのカリキュラムデザインに取り組を始めつつあるというような流れになっています。また、我々としては、将来のコンソーシアムをにらんで、事務局とも連携を取りながら考えているところです。

**【太田委員】** やはり成功事例みたいなものをいかにたくさんつくるかということが、一番大事なような気がします。

今ある東京の地域教育推進ネットワーク東京都協議会の中にある資源に、どのようなプログラムがあり、どのように生かされているというような成功事例を出せるかが重要です。高校のタイプに応じた支援というものがそれぞれもし出せれば一番いいですが、なかなか一気には難しいので、もうそこは理念的な部分で構わないから、できそうなところ、例えば進学校と進路多様校だけが、今抱えている資源から言うとうまくフィットできるということでしたら、まずそこから始めていくということでも構わないと思います。

そうすれば、問題も徐々に見えてきて、企業ももう少し、自分たちがどういうふうなコミットの仕方とかがあるのかというのが見えてくるように思います。

ただ、個人が専門的な人材として活躍する場面と組織的に企業等の団体がプログラムを開発して何かやっていく場面では、少し違うところがあると思いますので、その辺の仕分けが必要な気がします。それから、例えば今の子供たちにとって、自分たちが疑問を抱いたことに対して、答えてほしいという気持ちはすごくあるだろうと思いますが、そのときに、いわゆる知識的なものではなくて、経験値をもって、どう答えられるかということが大切だと思います。何か適当にはぐらかすと、子供たちは、何だ、外部人材もそんなものなのかとしか思わないでしょう。そこは真実に近いところまできちんと答える用意が教育プログラムとして提供しているところには求められるのではありませんか。

**【村上部会長】** 正に、平賀委員たちがコーディネートされている銀行の大学生向けのインターンシップに、下のレベルの子供たちも関わるような中で、社員の人たちが本音でぶつかるという話をお聞きしましたが、それと全く共通するような話だなと思って伺いました。

それで、先ほどの区市町村のところでは事務局のほうから出された、どうしていったら面的に広げていけるかというところに、私なりに皆さんの御意見が参考になったなと思ったことがありましたので、最後のまとめにかえてお伝えしようと思います。

結局、先行事例が必要だということがありますが、それを知らしめていくということは

大事ですけど、ともすると、いついつ、どこで、何をしたということだけが情報として伝わる傾向があります。大事なのは何ができたという成果の部分をもっと生に伝えていくことだと思います。今示していただいているような内容の施策を、我々も含めて実現していった先には、きっとその成果をどう見せるかというところが我々の課題になるかと思えます。次の方向性も見えてきたということで、まとめに代えさせていただきます。専門部会としてはこれが最後の集まりになりました。皆さんの活発な御議論をありがとうございました。

ここで、地域教育支援部長が間に合って御出席いただきましたので、最後の専門部会ということで、まとめのお話をいただければと思います。

**【地域教育支援部長】** 議会の関係で遅れまして、申し訳ございませんでした。

この間、ずっと議論させていただいて、私の意見も述べさせていただいておりますので、基本的にはこの延長でまとめさせていただいて、全体会にかけさせていただければと思っております。

1点だけ、資料4-3の補足をさせていただきたいのですが、今まで企業の方が学校に入るということは、基本的に教壇に立つなど教える側として入るという理解になると思いますが、ここで書いてあるのはそういうことではなくて、折衝力のある一企業人が自分の住んでいる地域でコーディネーターをするなど、要するに裏方として入るというのも有り得るのではないかということです。

それから、もう一つは、学校側で例えば校長、副校長の立場に立ったときに、自分の学校も企業等のプログラムを活用したいと思う方は多分たくさんいると思われれます。ただ、自分の学校の職員の体制、地域の人の状況、PTAの人の顔を浮かべたときに、「ああ、ちょっと無理だな」というふうに判断して、やれない方もおられるのではないのでしょうか。

そういうときに、例えばこちらのネットワーク協議会でチームのような組織をつくっておいて、申し出のあった学校に出向いて、慣れるまで手取り足取り面倒を見てあげて、ある程度慣れてきて独り立ちできたら、そのチームは次のところに行く、というようなことを考えられないかと思っております。

そのようなことをイメージしておりますので、全体会までには間に合わないと思いますが、その後の御議論でも結構ですので、皆様の頭の中でお考えいただいて、何かそういう方策がないか御検討いただければと思います。

本日はどうもありがとうございました。

【村上部会長】 ありがとうございます。

それでは、これで専門部会のほうの議論を締めたいと思いますが、次回3月15日の全体会のほうでは、今まではまとめていただいたプランについては事務局のほうで御説明いただいておりますが、専門部会の報告ということになりますので、力不足ですが、私のほうで全委員に向けて皆様の議論のまとめを報告させていただくことになります。

皆さんにも是非足りないところを補足をしていただくと、私としては心強いので、よろしく願いいたします。

それでは、次回に向けての御案内等、事務局のほうでお願いします。

【主任社会教育主事】 今、部会長からお話があったように、第3回の全体会、3月15日火曜日、この階で行います。

以上です。

【村上部会長】 ありがとうございます。

それでは、専門部会の議論、皆様ありがとうございました。

これにて閉会にしたいと思います。どうもお疲れさまでした。

閉会：午後7時58分

—— 了 ——